里村欣三と革命上海——放浪と組織の間に

王　碩

はじめに

里村欣三（さとむらきんぞう）、本名を前川二亨（まえかわにきょう）という。一九〇二年、岡山県和気郡福河村（現在の日生町寒河）に生まれる。父は駅弁の経木を扱う商売を手広く営む資産家であり、同時代のプロレタリア作家たちと比べると比較的裕福な家庭で育った。しかし、五歳の時に母を亡くし、その後父が再婚したため、妹とともに親戚のもとに預けられることとなる。十歳になると再び父のもとへ戻るが、こうした幼少期の境遇が、後の放浪的な性格の一因になったとも考えられている。大家真悟は、里村欣三の幼少期の生活を後の放浪的な性格と結びつけ、「後年の里村欣三の『放浪癖』は、暖かい居場所を求めるこころの裏返しであった、といえば観念的に過ぎるかも知れないが、『里村欣三』を論じる一視点として知っておきたいことである。」[1]と評価している。関西中学校に在学中の里村は、当時日本全国を揺るがせていた「米騒動」の影響を受け、その流れの中で首謀者の一人として新校長を弾劾するストライキに参加した。しかし、ストライキは失敗に終わり、里村は金川中学校への転校を余儀なくされる。この経験は、里村の反権力的な姿勢を形成し、その後の活動にも大きな影響を与えた出来事の一つと言える。関西中学校を中退した後、里村は父親との関係が悪化し、転校した金川中学校でも不登校が原因で除名処分を受けた。十七歳の時には、武士の家系である祖母から送られた刀で自決騒動の後、里村欣三は故郷を出奔するに至った。

岡山から東京まで放浪を続けた末、里村は東京で市電の車掌として働き始めた。そこで、日本交通労働組合（東京市電）の理事長である中西伊之助と出会い、この出会いを契機に日本交通労働組合に加入し、本格的に労働運動へと足を踏み入れることとなった。一九二〇年九月には、日本社会主義同盟の創立メンバーの一人として名を連ね、社会主義運動に深く関わるようになる。しかし、一九二一年五月に日本社会主義同盟が解散すると、東京を離れ、神戸市電の車掌として新たな生活を始めた。一九二二年三月には、西部交通労働同盟に参加したことが原因で神戸市電を解雇され、抗議活動の中で電車課長を刺して逮捕された。同年、徴兵検査を受けたが、兵役を拒否して満洲へ逃亡した。その後帰国し、職を転々としながら、プロレタリア文学の作家として活動を展開し、プロレタリア文芸雑誌『文芸戦線』に身を投じた。そこで彼は底辺労働者をテーマにした作品を執筆し、プロレタリア文学運動の一翼を担うようになる。里村が脱走兵だったのか、徴兵忌避者だったのか、また具体的に兵役を拒否した理由については、明確な結論は出ていない。しかし、軍国主義が支配する日本において、彼が二年間[2]の兵役を受け入れることよりも、異国での苦しい放浪生活を選んだことは確かな事実である。高崎隆治は里村について、

「この国の文学者の中で、軍隊を拒否したただ一人の人間だということである。」[3]と評しており、この評価は里村の自由への強い信念と、あらゆる束縛からの解放を求める姿勢を端的に示している。

若き日に兵役を回避して積極的にプロレタリア文学運動に身を捧げた里村欣三は、軍国主義が台頭する日本において国家権力の弾圧を受け、「転向」の道を選ばざるを得なかった。その後、大政翼賛会の体制に組み込まれ、侵略戦場に身を置きながら一連の国策文学を執筆することとなる。時代の波に翻弄され、「従軍作家」として活動した里村欣三に対する評価は、友人や研究者の間でも大きく分かれている。同時代の友人である平林たい子は、回想録『自伝的交友録・実感的作家論』において、里村欣三との交流を記した章に「二人の里村欣三」という題を付けた。[4]これは、プロレタリア作家から軍国主義作家へと転向した彼の姿を象徴するものである。一方、高崎隆治は『従軍作家里村欣三の謎』の序文で、「私は、里村欣三を軍国主義者だとは思わないし、また、若き日の彼が『帝国軍隊』を拒否したからといって彼をマルクス主義者だとも思わない。彼は『自由』を人間にとってなによりも大切なものと考え、命令や束縛を嫌った、いわば自由人にすぎない。」[5]と評している。里村欣三の生き方と文学は、個人の自由を求める強い意志と、国家による抑圧との間での激しい葛藤を映し出している。このテーマは彼の人生と作品に貫く一貫した軸となっており、彼が日本文学史上でも特異な存在として注目され、議論の的となる理由の一つと言える。

里村欣三が「自由人」として持ち合わせていた放浪気質は、革命期の中国に対する彼の認識にも大きく影響を与えた。彼は国民革命の戦火に包まれた上海を二度訪れ、その経験をもとに紀行文や小説を執筆している。先行研究では、小牧近江との共著「青天白日の国へ」が、四・一二反革命クーデター期の日中文学者の交流を考察する貴重な史料とされ、小説「動乱」に関しては、無産階級作家でありながら中国革命を「傍観者」の視点で描いた点が批判されている。[6]しかし、これまでの研究の多くは個別作品に焦点を当てており、里村欣三の二度にわたる上海訪問を通史的に捉えたものは少ない。本論では、里村欣三の生涯を踏まえ、彼の上海革命を題材とした作品群を包括的に分析することで、日本の無産階級作家としての彼が中国革命をどのように認識し、その視点がどのように変化していったのかを解明する。そして、国民革命期における日本人作家と中国革命の関係についての理解を一層深めることを目指す。

一、「疥癬」——中国革命への始めての放浪

小説「疥癬」は『文芸戦線』一九二七年一月号に掲載された。この作品では、主人公「私」と仲間たちが一九二六年十月に上海を訪れた経緯が詳細に描かれている。「私」と、仲間の渡部、石田の二人は、日本社会の底辺に生きる労働者として描かれており、彼らの出会いは『文芸戦線』を通じてのものであった。作中、「私」と渡部は東京駒沢ゴルフ倶楽部の下コックとして働いていたが、資本家に仕えることへの挫折感や屈辱に耐えられず、不満を募らせていた。この時期、「私」は、福寿堂という喫茶店の娘のお時さんと出会い、恋に落ちる。しかし、若く美しいお時さんへの片思いが実らないことを悟り、その苦しみから逃れたいと願うようになる。一方、その頃の中国では、広州から出発した北伐軍が勢いよく北上し、大きな進展を遂げていた。この激動の時代背景は、鬱屈した生活を送る私たちの現状と鋭く対比される。抑圧された日々の中、北伐戦争の成功は、彼らにとって磁石のよ

うに強い魅力を放った。「私」は新聞を通じて、蔣介石率いる北伐軍が武昌を攻撃し、軍閥の孫伝芳の部隊と激しい戦闘を繰り広げていることを知る。同時に、万県では英艦による残虐な砲撃事件（万県惨案）が発生し、中国各地で国民党員と共産党員が外来侵略への抵抗と北伐軍の革命運動を支援するために立ち上がっていた。こうした歴史の奔流の中で、「私」たちは日本社会の閉塞感からの脱出を求め、新たな希望を抱きながら上海へと向かうのであった。

一九二六年秋、北伐軍が勢力を急速に拡大していた。七月九日に広州で決起してからわずか三か月で湖南と湖北を攻略し、北洋軍閥の呉佩孚の主力をほぼ壊滅させるという快進撃を収めた。その後、北伐軍は江西へと進軍し、東南五省を支配する孫伝芳との戦いへと突入していった。こうした歴史の大きなうねりの中で、「私」は中国革命の勢いを目の当たりにし、内面的な衝動に駆られていく。作中では、「行け！行け！産業労働者の組織の中へ——そして意義ある解放戦の部署に就け！！」[7]と、北伐戦争に対する熱い呼びかけが描かれている。この記述から、「私」と仲間たちが北伐戦争に抱いていた期待は、あくまで労働者階級の観点に基づくもので、国民大革命の全体的な性質を正確に理解していなかったことが浮かび上がる。彼らは北伐戦争を、産業労働者が主導する資本主義への抗議運動として捉え、革命の背景にある中国国民党と中国共産党の協力関係には十分な注意を払っていなかった。実際の北伐戦争は、帝国主義と封建軍閥に対抗する国民大革命の一環であり、中国共産党と中国国民党の協力によって進められた。しかし、「私」たちはこの革命を、労働者階級が主導する単純な反資本主義運動と見なし、国民革命の指導権を握る中国国民党の性質が資本主義的要素を含んでいることを十分に認識していなかった。このような誤解は、当時の日本のプロレタリア作家たちが中国革命を理想化し、その政治的複雑性を十分に理解していなかったことを示唆している。彼らの期待は、階級闘争という単一の枠組みに基づくものであり、中国の現実の政治状況や革命運動の多面的な性質を見落としていたのである。「私」たち三人が「行こう！」「行こう！」と叫び、中国革命に身を投じる決意を固める瞬間は、「疥癬」の中で重要な転機を象徴している。このシーンでは、彼らの心が一体となり、放浪者としての自由な生き方と中国革命への理想が交錯し、時代の波に飲み込まれていく様子が鮮やかに描かれている。

『放浪——これは詩的な言葉であるが、さて実際にあたってみると、仲々容易なものじゃない。誰でも困難を後から回想すると、みんなその時の実感が失われて、夢のような面白い物語のような思い出せると同様に、放浪者の物語もまたその類だよ。事柄はどんなに悲惨なものであっても、他人にはそれが悲惨で冒険的であればある程面白く聞けるもんだ。放浪は詩的な感情で動かされて、その時の気持は餓死と野垂れ死にを目の前に据えた絶望的な自暴自棄だ。その捨身の度胸がなければやり得られるもんじゃない。常識で判断できない冒険だ。無茶だ。自棄だ。その無茶と乱暴な行動のなかに、万が一の奇蹟を望むのが放浪者の希望だ。かすかな光明だ。万一その奇蹟がなければ放浪者は餓え死にと野垂れ死だ。一か八かの人生を賭した賭博だ。』[8]

その演説は、彼らの行動が革命への具体的な理解に基づくものではなく、むしろ浪漫主義的な熱情と殉教的精神に根ざしていることを強調している。しかし、この浪漫主義的な視点が、彼らの革命観や中国の現実に対する一定の誤解を含んでいた。このように、「疥癬」は、

放浪と革命という二つのテーマを絡めながら、個人の解放と社会的変革への思索を描き出した作品なのである。

先行研究では、「疥癬」が作者の里村欣三の自伝的性質を色濃く持つ作品として評価されることが多い。本作に登場する主要人物は、里村が一九二六年前後に実際に出会った知人たちをモデルにしていると考えられている。例えば、大家真悟は、「疥癬」に登場する人物と里村の知人との関連性について詳細な考証を行っている。大家は、平林たい子の回想録『自伝的交友録・実感的作家論』[9]を参照しながら、登場人物と里村の知人との関係を探り、以下のような推測を立てている。石田のモデルは、当時『文芸戦線』の編集を務めていた詩人石井安一であり、組織M・UのS氏は日本交通労働組合の理事長代理を務めていた杉原正夫が原型と考えられている。一方、渡部のモデルについては、現時点では特定されていない。また、中国の友人を紹介する「K君」は、小牧近江がモデルである可能性が高いとされている。[10]山田清三郎は「疥癬」について、「ユーモアのある作品で、そのなかに、三人の青年に反映した時代というものが、とらえられている」と評している。[11]さらに山田は、この作品が単なるフィクションではなく、事実に基づいているからこそ面白さが際立っていると指摘している。[12]また、大家真悟は編著『里村欣三の風骨』の中で、「疥癬」における「私」のお時さんへの片思いに注目し、当時の里村が徴兵忌避の罪名を背負いながらも、無政府主義的思想を抱く青年としての活力と情熱を感じさせる姿を評価している。[13]これらの評価は、「疥癬」が単に里村欣三の個人的な体験や思想を反映するだけでなく、当時の青年たちの迷いと情熱、そして自由を追求する姿勢を象徴する作品であることを示している。

蒋介石による「反革命クーデター」が発生する以前、里村欣三はプロレタリア作家としての階級意識を基盤に、中国革命への参加を熱望していた。「疥癬」では、上海行の主な目的としてこの革命への関与が描かれている。作品中、「私」が出発前に「K君」を訪問する。この「K君」について、大家真悟の分析によれば、当時プロレタリア文学運動の旗手であった小牧近江を指しているとされる。また、小牧近江との交流を通じて知り合った中国友人の存在が示唆されており、里村が彼らを介して中国革命に参加する可能性があったことが読み取れる。「私」が日本のプロレタリア作家の一員として放浪の旅に出るのは、自発的でありながらも、国民大革命に参加する中国共産党との連携を求める姿勢が強く表れている。この行動は、プロレタリア作家としての階級意識に基づき、国境を超えた無産階級の連帯を追求する使命感の表れと言えるだろう。

物語の結末部分には、「私」と仲間たちがついに中国に到着する場面が描かれる。「私」が国際大都市である上海に対して抱いた最初の印象には、プロレタリア作家としての鮮明な階級意識が色濃く反映されている。

> 上海は華麗な街である。紳商と豪富の街である。だが貧乏な支那人に取って、貧しい裸一貫の日本人にとって、富貴的華麗な上海は、反対に貧苦的大地獄である。窮人的煉獄である。[14]

「私」は中国の友人と直接接触することは叶わなかったものの、中国共産党員の足跡を追い続けた。そして、上海の街頭で偶然にも共産党員が革命活動を行っている姿を目撃する場面が描かれている。この場面では、ただの傍観者としてではなく、自らの革命への憧れや使命感を募らせていく「私」の内面的な変化が強調されている。

上海の国民党員共産党員は、官憲の眼を掠めて、変現自在に活躍する。

ある街頭で、擦れ違った支那の断髪美人から小冊子を与えられた。

女はその時、かすかに

「まあ！」と云った。みると、小冊子を握った私自身の手の疥癬を、瞬間じっとみつめていた。手をポケットにひっ込めた。

それは『上海市民的出路』という共産党の激文であったのだ。その末尾に

『你們不知中國共產黨在何處、不知中國共產黨員是何人麼？

誠然、中國共產黨現在尚是秘密的不宣於公開其組織、但中國共產黨的組織已遍於全國。中國共產黨員、時時在你們中間、為你們奮斗到底！』[15]

最終的に、私は「仕方がない。俺達は招かれぬ放浪者だもの……」[16]という事実を意識した。「私」と仲間たちは中国の友人からの革命参加の知らせを待ち続けることができず、持参した資金も底をついた。罹患していた疥癬は悪化の一途をたどる。本作は「疥癬」というタイトルが付けられており、その病に罹患する過程が物語の主軸となると同時に、革命への参加を志す試みが叙事の伏線として機能している。最終的に、彼らの革命参加の願いは叶わず、ただ疥癬が悪化していくという結末は、作品全体に無力感や諦念の色を濃く漂わせている。これは、当時の日本のプロレタリア作家たちが抱えていた理想と現実の乖離を象徴するものとも言えるだろう。

里村欣三は、一九二七年四月に『文芸市場』に掲載された随筆「上海の共産党」において、上海に潜伏する中国共産党員の活動を描いている。本作は、彼自身が中国共産党の地下活動の足跡を追い求めた記録であり、日本のプロレタリア作家としての視点から、中国革命への関与を模索する姿勢が色濃く反映されている。この随筆を通じても、里村の上海行が最終的に目的を果たせなかったことが裏付けられる。「上海の共産党」において、里村欣三は中国共産党員の姿を直接目にすることは叶わなかったものの、街角に貼られたビラや新聞で報じられる彼らの活動を通じ、その周密で秩序ある組織力に深い感銘を受けた。これは、彼が当時の日本のプロレタリア文学運動の枠を超え、国際的な無産階級の連帯を志向していたことを示すものでもある。里村は、「実にその組織の巧妙さと、大胆と機敏なる共産党員の活動は実に驚嘆すべきものである。支那民衆も、私も同様に『共産党』の所在も、その実体も知らないが、ただその機敏なる、大胆なる活動だけは知っている。そして何時か共産党員が、市民大会を開くことを信じている。」[17]と述べている。

里村欣三は当時、中国共産党員に対して心からの敬意を抱き、その組織がさらなる発展を遂げることに大きな期待を寄せていた。「十月二十日頃」のある夜、彼は爆弾の爆発音や激しい銃撃戦の響きを耳にした。翌日、新聞を通じて、共産党員が決死隊を組織し、各官庁や警察を襲撃した結果、三十名が逮捕されたことを知る。里村が随筆「上海の共産党」に記録したこの秘密活動は、一九二六年十月に中国共産党が指導した第一次上海工人武装蜂起と一致する。この蜂起は、当時進行していた北伐戦争を背景に、中国共産党が国民党との合作の枠組みのもと、帝国主義や封建勢力に対抗する革命運動の一環として展開された。「中国共産党は、この蜂起によって北伐軍の進軍を支援し、軍閥の支配を打倒し、上海に民主政権を樹立することを目指していた」[18]のである。しかし、労働者階級の武装力の限界、労働者以外の市

民層からの広範な支持の不足、さらには国民党資産階級の裏切りといった要因[19]により、第一次上海工人蜂起は結果的に失敗に終った。一方で、一九二七年三月二十一日には、中国共産党が上海で八十万人の労働者による大規模なストライキと第三次武装蜂起を成功させ、革命的な大勝利を収めた。この蜂起により、労働者階級が中心となって軍閥の支配を打破し、上海の支配権を獲得するという重要な成果が達成された。[20]里村欣三にとって、第一次上海行は革命への直接的な関与という意味では挫折に終わったが、それでも彼は中国革命、特に中国共産党の武装闘争への期待を捨てることはなかった。とりわけ、労働者階級が主導する革命運動に対する強い共感と、その成功への確信は変わることがなかった。この期待は、彼が再び上海を訪れた一九二七年四月末まで続いていたと考えられる。

二、二篇の紀行文――『文芸戦線』を代表しての派遣

里村欣三が上海を再訪したのは、一九二七年四月、まさに「四・一二」反革命クーデターの渦中であった。当初の目的は、『文芸戦線』の同人である小牧近江とともに、文芸戦線社の特派員として上海を訪れ、汎太平洋反帝会議に参加することであった。[21]里村欣三が最初に上海を訪れた際は、中国革命への参加を強く願う個人的な熱意と衝動によるものであった。しかし、一九二七年四月の訪問は、プロレタリア文学運動の拠点である文芸戦線社を基盤とし、計画的かつ組織的に行われた秘密派遣であった。この訪問は、派遣目的や旅費調達が綿密に計画されており、単なる個人的な行動ではなく、日本のプロレタリア文学運動の組織的活動の一環として位置付けられていた。特派員として派遣された小牧近江は、戦後に発表した回想録『ある現代史：〝種蒔く人〟前後』の中で、この訪中の詳細な経緯を記録している。フランスの小説家アンリ・バルビュスからの手紙を通じて、小牧は中国へ招かれ、彼とともに汎太平洋反帝会議に出席するよう要請を受けたのである。若き日の小牧はフランスに留学し、バルビュスが主導した反戦・反帝国主義運動である「クラルテ運動」に強い影響を受けた。そして、その精神を実践するため、帰国後にプロレタリア文芸雑誌『種蒔く人』を創刊し、第三インターナショナルの思想を日本国内に広める活動に尽力した。この『種蒔く人』は、日本のプロレタリア文学運動の先駆けとなり、極めて重要な役割を果たしたのである。小牧は、この『種蒔く人』の精神を継承するものとして、後継誌である『文芸戦線』の同人が国際会議に参加するのは当然の責務であると考えた。[22]そのため、『文芸戦線』の編集会議において自ら志願し、特派員として中国へ赴く決意を固めたのである。

一九二七年春、中国革命の情勢が複雑かつ厳しさを増す中、「中国の革命的文学者と、日本のプロレタリア文学者の友誼をかため、相互の運動を協力しあうために」、[23]当時『文芸戦線』の編集長を務めていた山田清三郎は、小牧近江の要請を承認した。そして、中国への訪問経験が豊富な里村欣三を同行者として派遣することを決定した。山田清三郎は自身の著書『プロレタリア文学風土記：文学運動の人と思い出』の中で、小牧近江と里村欣三の上海訪問を「日中無産階級文芸家友交のさきがけ」[24]と称えている。この派遣は、日中間の無産階級文芸界における歴史的な交流の重要な第一歩として広く認識されている。

しかし、日本政府当局の厳しい監視の下で特派員として派遣された小牧近江と里村欣三の上海行は、多くの困難に直面した。小牧近江の回想によれば、「東京をたつ時、国民党左派の身分証明書を持参して

いました。大きな和紙に、墨黒々と書きバンと太鼓印を押したものだったので、どうにもしようがありません。扱いに困って油紙に包んで靴の底にかくして、びくびくしました。」[25]この国民党左派の身分証明書を所持していたことは、彼らの派遣が中国国民党当局の認可を受け、一定の合法性を有していたことを示している。しかし、日本の特高警察の厳しい監視を受ける中で、上海への旅は極めて慎重を要した。平林たい子も交友録の中で、この上海訪問について、「この上海行は官憲には絶対秘密で行われたが、あとで感づかれた。特高係は、一度里村に会って、上海での細かい行動を知るため、里村の後を追い回した。」[26]と記している。一方、山田清三郎の回想によれば、二人の特派員が中国へ出発した時点では、まだ反革命クーデターは発生しておらず、日本のプロレタリア文学者たちは中国革命の前途に対して比較的楽観的な見方をしていた。しかし、二人が上海に到着した後、革命情勢が急速に悪化し、蔣介石が左派勢力に対する激しい弾圧を開始した。[27]上海の混乱した状況と左派勢力に対する苛烈な弾圧により、計画されていた汎太平洋反帝会議も中止を余儀なくされた。

「青天白日の国へ」は、小牧近江と里村欣三が特派員として反革命クーデター後の上海で見聞した内容をもとに執筆した紀行文であり、一九二七年六月号の『文芸戦線』に掲載された。この号は、当時のプロレタリア文学運動が中国革命に寄せていた強い関心を反映しており、中国革命に関する豊富な内容が特集されている。巻頭には、郁達夫による中日二言語の声明文「日本の無産階級文芸界の同志に訴う」が掲載されている。また、佐野袈裟美の論考「支那国民革命の危機」や、小牧近江の「新軍閥蔣介石の正体」が収録されている。さらに、郭沫若、郁達夫、魯迅を含む中国作家たちが連名で発表した「中国文学者の英国知識階級および一般の民衆に対する宣言」[28]も収められている。本号の「編集後記」では、「青天白日の国へ」を含む中国関連の文章を特集として読む価値があると強調されている。これにより、日本のプロレタリア文学運動が反革命クーデター後も中国革命をどれほど注視し、重要視していたかが明らかである。

「青天白日の国へ」は、一九二七年四月二十四日から二十八日にかけて記された一連のリアルタイム通信を含む紀行文であり、小牧近江と里村欣三が上海で実際に目撃し、体験した内容が記録されている。これらの通信は、彼らが反革命クーデター発生後の状況を日本国内の読者に伝えることを目的として執筆された。彼らが上海に到着した時点で、クーデター発生からすでに十日が経過していた。そのため、彼らが目撃したのはクーデター直後の混乱期ではなく、その後の「相対的に」安定し始めた状況であった。紀行文には、クーデター直後の混乱が徐々に落ち着きを見せる上海の街並みや市民生活の様子、中国の文芸界の同志たちとの会見、さらに低迷する中国革命の現状に対する態度などが記録されている。

第五通目の通信は小牧近江が執筆したもので、上海での旅の詳細を綴った最初の四通の通信手紙とは異なり、彼自身の主観的な認識が語られている。この通信では、上海に住む長崎人をきっかけに、中国や中国革命に対する自身の思索を深める様子が描かれている。小牧近江によれば、物理的な距離としては、長崎から上海までよりも長崎から東京までのほうが遠い。しかし、抽象的な意味においては、上海は非常に遠く感じられたという。彼はまた、「對支絶対非干渉」の叫びや、中国南部政府の即時承認がヨーロッパで加工されたのちに日本に伝えられたことを指摘している。上海で反革命クーデターを目撃した小牧は、中国革命の現状に対して深い悲しみと疑念を抱きつつ、将来に対しても悲観的な態度を示していた。

愈々解らないのは支那の革命だ。何か知らごたごたしたものが、北極の涯てかなんかでわけのわからぬことをしている風にか考へられない勝ちの現在ではないか。

もとより、ロシア革命あっての民国革命だ。その点、僕らはますますロシア革命の精神と意義とに心からの××××表わさなければならない。

だからといって、目の前に運命を堵している若い支那の革命を遠方の烽火かなんかの気でのみ見ていられようか。昨年十月十日[29]以来破竹の勢で中華民国に新生をもたした我らの先輩、共産主義○○○○は蔣介石の変節と、帝国主義列国の幇助によって例へ、それが一時的現象にもせよ、一頓坐をきたそうとしている。

長崎人にとっての上海は大阪より近い。と、同時にモスクワより近い民国の革命をも亦等閑にふすことのあってはならない。僕らは今少しく遠まはりしない支那を学び、時にとってはかの地を踏むことをも企て、より積極的にかの同志の力となり、血ともなりたいものだ。[30]

中国革命と比較して、小牧はすでに成功を収めたソ連革命の価値を意図的に強調していた。ロシア十月革命の勝利を背景に、日本のプロレタリア作家たちは中国革命に大きな期待を寄せていたのである。小牧は結びの中で、里村欣三の「みんな順番に、入り替り立替り來たいもんだ」という願いにも言及している。これは、中国革命が挫折を経験したにもかかわらず、小牧近江をはじめとするプロレタリア作家たちが、中国共産党の貢献を肯定し、革命の挫折を一時的な現象にすぎないと認識していたことを示している。彼らは日本のプロレタリア作家としての立場から、日本の同志たちが中国革命の力となるべきだと主張した。

二人の特派員は、同じ号の『文芸戦線』に共同署名の形で評論「新軍閥蔣介石の正体」を発表し、中国革命を支持する立場を明確に示した。その中で彼らは「我等の先輩である支那××を支持せよ！」[31]と呼びかけ、中国革命を「我等の先輩」と敬意をもって称えている。この表現について、祖父江昭二は、当時の日本社会に一般的だった中国蔑視の観念とは対照的であると指摘している。[32]また、「青天白日の国へ」と併せて見ると、『文芸戦線』の二人の特派員は、蔣介石による反革命クーデター後の厳しい状況にあっても、中国共産党が再び革命を復興させると確信していたことがわかる。

同じく第二次上海訪問を題材とした作品として、里村欣三が単独で執筆した紀行文「翻る青天白日の旗の下で——上海一瞥」が、一九二七年七月号のプロレタリア評論雑誌『大衆』に掲載された。この文章の末尾には、「五月二十日夜於上海」と記されている。[33]本作は、一九二七年四月の小牧近江との上海訪問を素材にしており、発表時期も同年六月の「青天白日の国へ」と近いものの、里村欣三の視点は小牧近江とは異なっている。小牧近江と共同署名した「青天白日の国へ」が中国革命への支援を主題としていたのに対し、「翻る青天白日の旗の下で——上海一瞥」は、反革命クーデター後の帝国主義と新軍閥の圧迫のもとで苦しむ上海市民の姿に焦点を当てている。この作品では、作家自身が中国革命の未来に対する希望をほぼ完全に失っていたことが示されている。文章の冒頭では、反革命クーデター後の上海に対する里村の第一印象が描かれている。

上海はすっかり、あの太大殺後「反動」の鉄蹄に踏みにじられて、身動きも出来ない状態である。

各国の軍隊、鉄条網、土塁、飛行機、機関銃に封鎖されて、上海は今、悲しい「青天白日旗」を吹き靡かせてはいる。だが――

反動！

上海は更に民衆の悲哭に満ちた都会である。[34]

このとき里村欣三が抱いた上海の初印象は、「青天白日の国へ」で描かれた、反革命クーデター後に「静穏に帰りつつある」上海の街の様子とは異なっている。里村は本作において、帝国主義の圧迫下に置かれた上海市民の悲惨な状況を詳細に記録している。具体的には、アメリカの水兵が通行人に石を投げつける行為、中国人女性の服が租界の鉄条網に引き裂かれる様子、各国軍隊が南京路で示威行進を行う光景、さらには中国市民が「無産主義」などの言葉を使用することを禁じられ、「ここは英語の土地だ」と言われる屈辱的な場面などが描かれている。また、中国商館に翻る青天白日の旗も、里村の目にはひときわ刺々しく映っていた。

文章の結末で、「中国民衆が歓声を上げ、両手を掲げ、旗を振りながら迎えた北伐軍は、結局はその爪を隠した猛虎にすぎなかった。蔣介石はついに新たな軍閥に成り下がったのだ。」[35]と、里村欣三は上海市民の苦難の根源として、北伐戦争の指導者である蔣介石による革命への裏切りを強調している。さらに、里村は、「上海は今や、より多くの民衆の泣き声で満たされた街にすぎない」[36]と、上海という都市が彼にもたらした全体的な印象を再び強調する。独筆の紀行文「翻る青天白日の旗の下で――上海一瞥」では、上海市民の悲惨な境遇に焦点が当てられ、それが「青天白日の国へ」には見られない重要な特徴となっている。この違いは、里村欣三の中国革命に対する態度の大きな変化を象徴している。独筆作には、中国革命の情勢が好転することへの期待が一切見られず、大革命の失敗による影響を深く受けた様子が描かれている。里村はこの作品において、自らをプロレタリア作家としての特異な立場から切り離し、文芸戦線社の特派員から「普通の旅行者」へと視点を転換している。合筆作と独筆作における中国革命への態度の相違から、里村欣三は一九二七年の上海訪問後、時間の経過とともに中国革命への熱情が冷め、それを契機として革命について再考するようになったと推測される。

三、「動乱」――放浪の回帰

里村欣三は、第一次上海行を背景にした小説「疥癬」の中で、自らを「放浪者」と称している。この旅は、彼が中国革命との結びつきを模索し、そこに自身の理想を投影しようとする憧れを伴ったものであった。一方で、プロレタリア文学運動の組織的な活動から独立し、あくまで自由な行動として実行された。そのため、里村自身もこの経験を「放浪」と呼び、個人の独立性と自由性を重視する姿勢を示していた。第二回目の上海行は、プロレタリア文学運動の重要な組織であった文芸戦線社を拠点に行われた。この旅では、運動の旗手であり、国際的な視点を持つ小牧近江と共に特派員として派遣される形をとった。この出張によって、日中左翼作家の初めての握手が実現し、プロレタリア文学を通じた国際的な連帯の具体的な一歩となった。また、里村と小牧は共同執筆者として紀行文を執筆し、反革命クーデター後の中国革命の再起動に対する期待を強く表明していた。しかしながら、里村欣三は、自らの紀行文の中で文芸戦線社が掲げる「中国革命への支援」という主旨から距離を置き、むしろ革命が失敗した後の荒廃した上海の街並みを再現することに重点を置いた。そのため、

第二回目の上海行もまた、組織的な活動の枠を超えた、自由で放浪的な性格を帯びていた。これは、彼自身の根底にある自由奔放な「放浪者」の精神が、この旅に色濃く反映された結果といえるだろう。二度にわたる上海行の後、里村は革命の渦中にある中国を舞台とした作品として、小説「動乱」と「兵乱」を創作した。

一九二七年の反革命クーデター前後の上海を舞台にした短編小説「動乱」は、雑誌『文芸戦線』一九二八年二月号に掲載された。この作品が発表された時点で、里村欣三が上海を訪れてから十カ月が経過しており、「動乱」は彼が中国における反革命クーデターについて熟考し、文学的に昇華した作品であると考えられる。一方、中編小説「兵乱」は、一九二八年春の蔣介石による第二次北伐戦争前夜に焦点を当て、山東省莒県（きょけん）の農民運動を題材する作品である。本作は『文芸戦線』の一九三〇年一月号から四月号にかけて連載された。反革命クーデター後、蔣介石が主導した第二次北伐戦争は、里村欣三に新たな視点をもたらし、中国革命の挫折とその後の動向についての彼の考察が「兵乱」に反映されている。「動乱」から「兵乱」に至るまで、里村欣三は一貫して「革命中国」を描き続けた。物語の舞台は、反革命クーデター時の上海という大都市から、その後の農村地帯へと移行し、書く対象も市民階級から農民階級へと変化する。この転換は、里村が中国社会をより広範に捉え、革命の本質やその影響を深く探ろうとする姿勢を示している。これらの作品を通じて、里村欣三は中国革命の挫折とその後の困難に直面する人々の姿を描き、都市と農村、階級間の対立と変化を鋭く浮き彫りにした。このように、彼の文学は単なるプロレタリア文学の枠を超え、中国革命の複雑な現実と理想を記録し、批判する重要な試みであったといえるだろう。

里村欣三は、短編小説「動乱」の序文において、一人称で語られる「私」と物語内で描かれる出来事との関係について説明を試みている。

> 十九××年×月、私は××××の気運に昂揚し、プロレタリアートの熱情に飛躍する上海にいた。だが、私は悲しい放浪者で、この上海に波打つ支那プロレタリアートの光輝ある闘争の展開に、見苦しくも袖手傍観していなければならなかった。インターナショナルを信ずる者に取って、これはまた何んという恥辱であったろうか！[37]

序文における「私」の自己認識は、物語の基調を形作る重要な要素となっている。自らを「放浪者」と位置づけることで、自由でしがらみのない立場を示しつつも、単なる気ままな放浪者ではなく、明確に国際主義的な視点を持つ人物であることを強調している。この「私」は、上海の社会状況に強い関心を抱き、その観察者としての立場を通じて、物語全体が展開されていく。里村欣三は、「動乱」の主人公「私」を、以前の小説「疥癬」に登場した「私」と重ね合わせるように描いている。両者ともに放浪者的な性格を持ちながら、同時にプロレタリアートとしての視点を備えている。

物語は、北伐軍が上海に接近する直前の上海閘北W・P路公安里に住む船大工朱敬鎮一家の描写から始まる。冒頭では、「春にはまだ早かった。乾いた塵埃が、畳み石の舗道に吹きあげていた」[38]と記されており、背景となる時期が北伐軍の上海進軍が迫る一九二七年三月末であることがうかがえる。物語の中で、激動する上海の情勢のもと、朱敬鎮の女房は、命の危険を顧みず、K・U社から依頼された革命軍の党旗の縫製を引き受ける。一方で、女房が抱く不安とは対照的に、朱

敬鎮自身は一日中働いた後も、革命の進展を深刻に捉える様子を見せない。彼のような上海市民層は、革命軍の指導のもと組織的に反帝国主義・反封建主義の活動に参加する「進歩的労働者階級」とは一線を画す存在として描かれている。彼らにとって、北伐戦争の掲げる理想よりも、日々の生計が何よりも重要であった。朱敬鎮の女房は「勝ちは革命軍に相違ないが、それにしても激しい掠奪がなければいいが！こう毎年毎年のように戦争が続いてはやり切れたもんぢやない。」[39]と述べるが、これは、革命軍の勝利が確実視されている一方で、その後に続く略奪や混乱への懸念が市民の間に根強く存在していることを示している。さらに、朱敬鎮の女房の発言は、市民の間に広がる噂や恐怖心、そして革命軍に対する不信感を如実に表している。

『もう便衣隊が変装で、この上海市中に忍び込んでいるとも云うよ。大きな声では云えないが、あの連中は放火でこの市街を一斉にって、その騒動に乗じてこの上海を占領する計画なんだ――と聞いたよ！』[40]

革命軍の便衣隊による放火や占領計画の噂は、革命軍が市民の支持を必ずしも得ていないことを示唆している。これは、革命軍が掲げる大義と、現実の市民生活の間に存在するギャップを浮き彫りにしている。一般の市民階級にとって、革命軍と封建軍閥のどちらが勝利するかは必ずしも重要ではなく、むしろ上海に潜伏する革命軍を略奪の脅威とみなす傾向があった。縫い上げられた青天白日旗は、革命とは無関係だった朱敬鎮の一家を、革命軍と封建軍閥の闘争に巻き込むことになった。ひそかに赤い旗を持ち去った六歳の一人息子の洪張がW・P路を歩いていたとき、集まっていた群衆の熱気が真っ赤な旗へと伝播し、人々は洪張を抱き上げて歓声を上げた。しかし、その直後、洪張は山東軍の警羅兵によって銃撃され、群衆は恐慌状態に陥りながら四散していく。

里村欣三の描写は、当時の市民階層が持つ革命に対する複雑な態度を鋭く浮き彫りにしている。朱敬鎮一家を通して描かれる「漠然とした無関心」は、市民階級の一部が抱えていた現実を象徴しており、彼らが日常生活に追われるあまり、革命がもたらす可能性に対する理解を欠いていたことを示唆している。さらに興味深いのは、革命軍の武装蜂起後に描かれる群衆の姿である。武装蜂起の翌日、「私」は上海新聞社の記者である友人とともにW・P路を歩いていた。その時の街の様子について、「街は平常と変りはなかった。革命の情熱とはまるで無関係で、無希望な群集がうな垂れ勝ちに、鼠色の列をつくって動いていた」[41]と記されている。この「鼠色の列」は、上海解放前夜の緊迫した状況下において、革命軍の宣伝や組織によって市民が動員されつつある様子を象徴している。また、三民主義が当時の市民階層に一定の影響を与えていたこともうかがえる。しかし、里村欣三はこの場面を単なる革命の成果として描くのではなく、批判的な視点を伴って表現している。彼は、市民の行動を「革命の情熱とはまるで無関係」「無希望」と形容し、さらにその列を「鼠色」と描写することで、死気を帯びた雰囲気を強調している。一見すると、市民たちは革命集会に積極的に参加しているように見えるが、その行動は煽動の結果であり、主体性や深い理解に基づくものではなかったと描かれている。しかし、革命軍の旗を掲げた子供の洪張が登場することで、街の雰囲気が一変する。「一度、そしてまた一度。私は日蔭の多い、陰気なW・P路、しかも未希望な群集の堵列が、その潮騒いのような歓呼に、そしてたった一ふりの赤旗に、鮮やかな希望に甦み返えるのを見た。」[42]

人々の歓呼は、街角を巡回していた山東軍の注意を引いた。しかし、山東兵が現れた当初、集まっていた群衆は恐慌を示さず、その場に留まり続けていた。状況が一変するのは、洪張が山東兵に射殺された瞬間である。この凄惨な出来事によって、群衆は一気に恐慌状態に陥り、慌てて四散していった。

北伐軍は上海に進軍し、長らくこの地を支配していた軍閥勢力を圧倒的な力で撃退した。しかし、里村欣三は意図的に北伐軍の正面戦場の描写を避けている。その代わりに、「私」の視点を通じて、革命軍の到来によって引き起こされる上海市民の混乱や恐怖に焦点を当てている。市民たちは、軍閥勢力と革命軍の衝突による戦火に怯え、自らの安全を確保するために混乱の中を逃げ惑った。

> 戦争がついに、間近かに迫って来たのだ！その忌わしい災難から、自分ばかりが群集の誰よりも真っ先きに安全地帯に駆け抜けようと藻掻き回っているのだった。この迂愚な個人意識さえなければ、何もこのように混乱しなくても済むのだ。だが、道路はこの個人意識の愚劣な洪水で、もう一寸の余地もないのであった。無意味な反撥があり、邪悪な排撃があり、意地悪い小ぜり合いがあった。――そいう諸々の無統制な要素を孕んで、群集の波は動いて行った。慌しく、せっかちに、しかも遅々として。[43]

山東軍が革命軍に敗北した後、「私」の視線は、敗残兵を満載した列車に注がれる。列車は走行中に革命軍の便衣隊の襲撃を受け、一部の山東軍兵士たちは絶望的な状況に追い込まれ、やむを得ず慶永里という住民区へと逃げ込んだ。その中の一人の山東軍兵士は、避難の途中で両親とはぐれた子供と遭遇する。やむを得ず家へ戻る途中だったその子供を、兵士はそっと抱き上げ、仲間たちと共に子供の家へと身を潜める。ここで、里村欣三は山東軍の敗残兵と子供の間に生まれる温かな交流の情景を丁寧に描写している。戦乱の渦中にあっても、人間同士の素朴な触れ合いや、敵味方の枠を超えた一瞬の安らぎが存在することを、この場面は静かに物語っている。

> 彼は繃帯を巻き終えると、子供を抱きあげた。「よし、よし！」子供は泣きやむと、彼の頭から軍帽をひったくって、それをかぶった。無邪気に頭をふって笑った。
>
> 「いいかい？」
>
> 兵隊はまた、それが判らなかった。笑って高々と、子供を抱きあげた。子供は愉快で堪らなそうに、手を叩いて騒いだ。[44]

無邪気な子供は、逃亡中の山東軍兵士たちに寄り添われることで、次第に恐怖心を抱かなくなった。しかし、この温かい光景は、すぐに過酷な現実によって打ち砕かれる。数名の山東軍兵士の潜伏先が革命軍の便衣隊に発見され、最終的に彼らは三日目の朝、子供の家の前で命を落とした。山東軍兵士たちが革命軍の襲撃を受け、逃亡の末に子供の家へと身を潜めるまでの経緯は、「私」という観察者の視点からは直接目撃することが難しい場面である。しかし、「私」の一人称の語りによって、その過程はあたかも見届けたかのように詳細に描写される。この点において、叙述にはやや不自然さが残ると言わざるを得ない。だが、里村欣三がこの場面を意図的に描いたのは、中国革命が対抗する封建軍閥の兵士たちも、実際には人間味にあふれた普通の人間であることを強調するためであろう。さらに、彼らの悲惨な最期は、革命という激動の時代の中で翻弄された、名もなき中国人の悲劇

の象徴でもある。

革命軍が上海を解放すると、上海市特別政府は正式に成立し、警察権は糾察隊へと移管された。短銃を携えた工人たちが治安維持の任務を担い、総工会は全世界の労働者に向けて声明を発表し、上海労働運動の大きな勝利を高らかに宣言した。「私」は世界のプロレタリアートの一員として、この歴史的な勝利の瞬間に立ち会った。しかし、その場にいながらも、革命の歓喜とは裏腹に、深い虚無感にとらわれることになる。この感覚は、序文で「私」が述べたように、自身がこの無産階級の運動において何の役割も果たせなかったという意識と呼応している。

この宣言を読んで、私は新しい世界を創造するプロレタリアートの情熱から、置き去られて行く憂鬱を感ぜずにはいられなかった。何んのため、そして私はどうするために、この動乱の上海にまごついているのであるか、私はまるで見当のつかない羽目に陥ち込んでしまったのだ。

窓をあけて見よ！落日を浴びて、勝利の革命軍が、規律正しい行軍を歩武勇ましく上海の心臓に進めているではないか！彼等は疲れている。鼠色の軍服は砂埃によごれてはいる。だが、彼等の左腕に輝く赤き名誉の腕章、その顔に微笑む勇気！

――私は黒い落胆を、感ぜずにはいられなかった。私は宿を出た。日が暮れかかった街頭には、どこの街角にも義勇軍と陸戦隊が着剣のまま突立って、行人の一人一人を誰何していた。

孤独の感じが、益々募って来た。私はついに単なる放浪者でしかないのだ！[45]

同じプロレタリアートでありながら、「私」は上海労働運動の勝利に興奮することはなく、むしろ方向を見失い、深い虚無感に陥った。自らを放浪者であると繰り返し強調し、中国革命との関わりを断ち切ろうと試みる。その虚無感を紛らわすため、「私」は上海租界の自国の酒場へと足を運び、酒に溺れた。「私は酒を浴びるほど呷った。私は死ぬほど呑まなければならない――と決心していた。××も、動乱も、そして嵐も、何にもかも一切が私を置去りにしたのだ。自分は孤独な放浪者だ。だから死ぬるほど酒に酔はなければならない！と、決めた。」[46]「私」は再び自らを放浪者であると強調し、革命軍の勝利、山東軍兵士の惨死、そして動乱が市民に与えた衝撃を目の当たりにしたことで、中国革命から距離を置きたいと強く願った。さらには、酔いつぶれて死んでしまいたいというほどの絶望に陥っている。

一方、上海解放後、市民たちが革命のスローガンを叫び、勝利の喜びに酔いしれていた中、顔面蒼白の朱敬鎮が、一歩ずつ前へと進み出た。彼の手には、息子の洪張の血で黒く染まった党旗が握られていた。「この愚かな私をここに導き、この演壇に飛び上らせたのは、皆さん！この血みどろに血塗られた党旗です。見て下さい！見て下さい！この血塗れの党旗には……」[47]この一文からも明らかなように、当初は中国革命に対して無関心だった朱敬鎮は、洪張を殺したのが封建軍閥ではなく革命軍であると誤解していた。彼にとって、息子の死をもたらしたこの動乱のすべてが敵であり、革命軍も封建軍閥も区別なく同じように憎むべき存在だった。そのため、上海解放後、彼は息子の死に関する説明を求め、革命軍に対して抗議の声を上げようとした。しかし、彼の言葉が終わるよりも早く、群衆の中から突如として短銃の銃声が響き渡った。

朱敬鎮の声が、そこで不意にばったりと止んだ。と、その瞬間に、私は確かに群集の無数の顔が、雑多な表情に閃めいて、死のような沈黙に呼吸をのんで、ぴたッ！と静止するのを、遥かな距離にある心持で感じた。群集は（確かに！）その発砲が、何を意味するのか、突嗟には理解できなかったのだ！（私も無論！）[48]

ここで作者は「短銃の発砲」を特に強調しており、文脈から推測すると、発砲したのは治安維持を担う工人労働者階級の短銃を携えた者たちであると考えられる。革命軍は、「民族主義・民生主義・民権主義」という「三民主義」の旗のもとで活動し、最初は正義を掲げていたが、今や無実の人々を無差別に殺害する加害者に成り果ててしまった。封建軍閥に息子を殺された朱敬鎮は、その怒りを封建軍閥を打倒した革命軍に向けて発した。一方、革命軍は朱敬鎮を都市の秩序を乱す暴徒とみなし、その命を奪った。この場面では、市民階級の愚かさと革命者の残虐さが鮮やかに描き出されている。周囲で革命軍を支持して集まった群衆は、里村によって革命の「背景板」として描かれており、彼らの隊列は、上海解放前には北洋軍閥の銃声で散り、上海解放後には革命軍の銃声によって再び散ってしまう。里村欣三は、上海の市民である朱敬鎮の悲惨な死を通じて、小説の結末において市民階級と革命者の内訌を意図的に描き出している。里村の考えでは、どの勢力が上海を統制しようとも、普通の市民の生活には何の改善ももたらされないことを示唆している。小説全体を通して、最初は中国革命に関心を持った「私」が、次第に放浪者として中国革命と一線を画し、最終的には中国革命の主体である革命軍を批判するに至るまでの姿勢が、明確に表現されている。

「動乱」において、里村欣三は革命に無関心な小市民階層である朱敬鎮一家の運命に焦点を当て、無実の群衆に対する同情を表現している。小説の叙述背景には、蔣介石による反革命クーデターへの直接的な言及はないが、里村は国民革命の失敗を理由に、革命軍、特にプロレタリアートの努力を全面的に否定している。この態度は、革命に対する里村の視点が単なる批判にとどまらず、革命の理念や実践そのものに対する疑問を投げかけるものとなっている。さらに、里村は「動乱」の結末で労働者階級を汚名化しており、前年の作品「疥癬」における中国革命への憧れとの鮮明な対比を成している。これは、里村が自身の放浪的な性格や、中国革命に対する正しい認識を持てなかったことと深く関わっている。「動乱」の「私」は、序文で自らをインターナショナルを信じる放浪者と強調していたものの、この時点では単に放浪者として描かれ、かつて信じていたインターナショナルの面影は見受けられない。むしろ消極的で冷徹に傍観する態度を取っている。この傍観的な態度は、作者里村欣三の性格を表すだけでなく、当時のプロレタリア作家が国際主義を扱う際の限界をも反映している。宮本百合子は、プロレタリア文学の発展を振り返りながら、国際的なテーマを扱う際のあるべき姿勢について、「一人の、或いは集団となった農民、学生、労働者をとらえて、プロレタリア的観点から描写するに当って、具体的条件として在る闘争への種々の可能性、矛盾、困難、進展性を相関的にもれなく洞察し、同時にその総和としての全局面を、内国的、国際的解放運動全般との関係において観、表現する技術として、われわれに唯物弁証法的方法の獲得は大切なのだ。」[49]と述べている。しかし、宮本百合子はまた、「大衆的な行為、階級闘争への結びつきの実際過程のうちに現れたり消えたりする数人の日本人各々の持つ階級的積極性・消極性が、ひとりでにわかるようには書かれていない。」[50]と述べ、プロレタリア作家たちが実際の執筆において、

異国の革命の渦中にいる日本人と、その異国の革命闘争との関係性を、最終的に適切に描き出すことができなかったと指摘している。このように、中国革命の本質を正しく理解しないまま、一時的な挫折に直面した中国革命に対して傍観的な態度を取る里村欣三の姿勢は、当時のプロレタリア文学において極めて象徴的なものであった。

おわりに

里村欣三の成長過程と労働闘争への参加を振り返ると、彼が裕福な家庭環境の出身でありながら無産階級闘争の道を選んだ背景には、青年時代に苦力としての苦しみを味わったり、体系的に社会主義思想を学んだこと以上に、子供時代から家庭の温かさに恵まれなかったことが大きな影響を与えていると考えられる。里村は、家族との不和といった体験を通じて、反骨的で自由奔放な性格を育んだ。この背景が彼を労働運動や社会主義運動へと駆り立て、プロレタリア文学運動の一員としての活動を支える基盤となった。自由を愛する放浪的な性格は、里村欣三の中国革命に対する複雑な態度を形作る上で重要な役割を果たした。結果を顧みず中国革命への憧れに駆られて上海へと渡ったものの、放浪の末に成果を得られず帰国した初期の行動は、その自由奔放な性格を象徴している。その後、文芸戦線社の特派員として反革命クーデターを目撃した際には、中国革命の前途に対して期待と疑念が入り混じった矛盾した感情を抱くことになった。最終的には、放浪者としての視点を貫き、「失敗した」とされる中国革命を傍観し、時には皮肉を込めて論じるようになった。中国革命の過程が里村欣三の認識を激しく揺さぶる一方で、日本のプロレタリア運動が彼の中国革命観に一定の影響を与えたことも否定できない。しかし、彼の思想の中核に存在していたのは、「自由人」としての放浪的な本質であり、この本質が彼の中国革命に対する認識の不安定性を生み出す要因となり、同時代の日本プロレタリアートにも共通する課題として現れた。里村欣三の思想には、中国革命に対する想像と失望、共感と皮肉が入り混じっており、これらの交錯する感情は、彼の文学作品や行動に特徴を与えた。彼は単なる革命支持者や批評家ではなく、複雑で矛盾した立場を持つ存在であった。このような複雑性は、当時の国際的な左翼運動の不安定な状況を反映すると同時に、彼自身の自由を重んじる姿勢に深く根ざしたものであり、それが彼の文学と人生を独自のものにしていると言える。

注

(1) 大家真悟『里村欣三の旗――プロレタリア作家はなぜ戦場で死んだのか』、論創社、二〇一一年五月、三一頁
(2) 大家真悟『里村欣三の旗――プロレタリア作家はなぜ戦場で死んだのか』（同前、一二一頁）
(3) 高崎隆治『従軍作家里村欣三の謎』、梨の木舎、一九八九年八月、二頁
(4) 平林たい子『自伝的交友録・実感的作家論』、文芸春秋新社、一九六〇年十二月、九頁
(5) 高崎隆治『従軍作家里村欣三の謎』（前掲、三頁）
(6) 代表的な関連研究として、澤正宏「里村欣三の文学――徴兵忌避をしたプロレタリア作家から一兵卒への道」、『言文／福島大学国語教育文化学会編』通号五三、二〇〇五年、三六～五一頁、李雁南「里村欣三が描いた中国人像――支那苦力を中心に」、『中央大学政策文化総合研究所年報』第一二巻、二〇一九年九月、一四九～一六三頁、単援朝「日中無産階級文学運動的第一次握手――小牧近江、里村欣三上海之行考」、『郭沫若学刊』、二〇二一年三月、五八～六九頁をここでは挙げておきたい。
(7) 里村欣三「疥癬」、『文芸戦線』、一九二七年一月、三八頁
(8) 里村欣三「疥癬」（同前、三九頁）
(9) 平林たい子『自伝的交友録・実感的作家論』（前掲、一四頁）
(10) 大家真悟『里村欣三の風骨小説・ルポルタージュ選集』、論創社、二〇一

九年三月、七二二頁
(11) 山田清三郎『プロレタリア文学史 下巻（風雪の時代）』、理論社、一九五四年九月、五〇頁
(12) 山田清三郎『プロレタリア文学史 下巻（風雪の時代）』（同前、五二頁）
(13) 大家真悟『里村欣三の風骨：小説・ルポルタージュ選集』（前掲、七二一～七二二頁）
(14) 里村欣三「疥癬」（前掲、四六頁）
(15) 里村欣三「疥癬」（前掲、四七頁）
(16) 里村欣三「疥癬」（前掲、四七頁）
(17) 里村欣三「上海の共産党」、『文芸市場』、一九二七年四月、四八頁
(18) 復旦大学歴史学系、上海社会科学院歴史研究所『１９２７年前的上海工人運動史』、上海社会科学出版社、二〇二一年七月、二一一頁
(19) 復旦大学歴史学系、上海社会科学院歴史研究所『１９２７年前的上海工人運動史』（同前、二一三～二一四頁）
(20) 復旦大学歴史学系、上海社会科学院歴史研究所『１９２７年前的上海工人運動史』（同前、二七三頁）
(21) 大家真悟『里村欣三の旗――プロレタリア作家はなぜ戦場で死んだのか』（前掲、二〇六頁）
(22) 小牧近江『ある現代史：〝種蒔く人〟前後』、法政大学出版局、一九六五年九月、一二二頁
(23) 山田清三郎『プロレタリア文学風土記：文学運動の人と思い出』、青木書店、一九五四年十二月、一〇一頁
(24) 山田清三郎『プロレタリア文学風土記：文学運動の人と思い出』（同前、一〇一頁）
(25) 小牧近江『ある現代史：〝種蒔く人〟前後』（前掲、一二四頁）
(26) 平林たい子『自伝的交友録・実感的作家論』（前掲、一七頁）
(27) 山田清三郎『プロレタリア文学風土記：文学運動の人と思い出』（前掲、一〇一～一〇二頁）
(28) この宣言は、上海の創造社が発行する雑誌『洪水』の半月刊第三巻第三〇号（一九二七年四月一日）に掲載された中国語原文に基づくものである。
(29) これは一九二六年十月十日、国民革命軍が武昌を攻略し、北洋軍閥の直系軍閥である呉佩孚の主力をほぼ壊滅させたことを指す。
(30) 小牧近江、里村欣三「青天白日の国へ」、『文芸戦線』、一九二七年六月、四五～四六頁
(31) 里村欣三、小牧近江「新軍閥蔣介石の正体？」、『文芸戦線』、一九二七年六月、一三七頁
(32) 祖父江昭二『近代日本文学への射程――その視角と基盤と』、未来社、一九九八年九月、五九頁
(33) 大家真悟が『里村欣三の旗』の中でまとめた里村欣三の年譜によれば、里村は一九二七年五月一日に小堀甚二、前田河広一郎、田口運蔵と共にメーデー（国際労働者の日）に参加した。このことから、里村は五月二〇日にはすでに日本に帰国していたと考えられる。したがって、紀行文『翻る青天白日の旗の下で――上海一瞥』の末尾に記された「五月二〇日夜、上海にて」という日付は虚構であることがわかる。
(34) 里村欣三「翻る青天白日旗の下――上海一瞥」、『大衆』、一九二七年七月、第六二頁
(35) 里村欣三「翻る青天白日旗の下――上海一瞥」（同前、第六五頁）
(36) 里村欣三「翻る青天白日旗の下――上海一瞥」（同前、第六五頁）
(37) 里村欣三「動乱」、『文芸戦線』、一九二八年二月、二五頁
(38) 里村欣三「動乱」（同前、三〇頁）
(39) 里村欣三「動乱」（同前、二六頁）
(40) 里村欣三「動乱」（同前、二六頁）
(41) 里村欣三「動乱」（同前、三〇頁）
(42) 里村欣三「動乱」（同前、三一頁）
(43) 里村欣三「動乱」（同前、三四頁）
(44) 里村欣三「動乱」（同前、三八頁）
(45) 里村欣三「動乱」（同前、四一頁）
(46) 里村欣三「動乱」（同前、四二頁）
(47) 里村欣三「動乱」（同前、四四頁）
(48) 里村欣三「動乱」（同前、四四頁）
(49) 宮本百合子「プロレタリア文学における国際的主題について」、『宮本百合子選集．第十巻（文芸評論集 第一）』、安芸書房、一九四九年八月、一四二頁
(50) 宮本百合子「プロレタリア文学における国際的主題について」（同前、一四八頁）

（おう　せき／中国海洋大学大学院博士後期課程）